

# アトリエ 琉游舎 だより 37号

2018年10月10日発行

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



- 秋の七草は、春ほどはなじみ深いものではないようです。春の七草は七草がゆのように食に関係するから身近に感じられるのでしょう。
- 「萩」：草かんむりに秋と書いて萩。まさしく秋を代表する草花。「尾花」：「すすき」の別名「幽霊の正体見たり枯尾花」の喩えにもある通りです。「葛」：葛湯・葛切り・葛根湯の葛。「撫子」：大和撫子の言葉にあるように清楚で可憐な花を咲かせます。「女郎花」：漢字で書くとなんですが、古代から美女・佳人のたとえとして和歌に多く詠まれているようです。「藤袴」：香りの良さから香水などに用いられています。「桔梗」：形の良さから家紋<sup>㊦</sup>によく用いられ、根っこは咳の薬になります。
- 藤袴や桔梗は絶滅危惧種に指定されているようです。さてコリーナの自然の中に秋の七草を全部見つけることが出来るでしょうか？
- 今、コリーナは秋の盛りです。思い思いの🎵小さい秋🎵をコリーナで見つけて下さい。

**写経会**

10月7日(日)  
11月4日(日)  
13時半から

**詩話会**

10月13日(土)  
13時半から

**映画会**

毎週木曜日  
13時半から

**10月23日 (火) 読書会**  
**10月25日 (木) 映画会** **はお休みです**

10/11	13時半	どん底 (92分・字幕)	ジャン・ルノワール監督。泥棒のバベルがある屋敷に忍び込むと、主の男爵は自殺を図ろうとしていた。男爵とバベルは意気投合するが、、、巨匠ルノワールの描く絶望と希望の映画。
10/18	13時半	嵐が丘 (104分・字幕)	エミリー・ブロンテ原作。兄妹のように育ったキャシーとヒースクリフ。2人は成長してもひかれ合うが、上流階級の生活にあこがれるキャシーは、、、ラブロマンス不朽の名作。
10/25		<b>10月25日 (木) の映画会はお休みします。</b>	
11/1	13時半	嘆きのテレーズ (103分・字幕)	マルセル・カルネ監督、シモーヌ・シニユレ主演。テレーズは恋に落ちた運転手と夫の殺害を実行する。夫の死は事故死と扱われ完全犯罪は成立するとみられたが、、、
11/8	13時半	ジェーン・エア (96分・字幕)	オーソン・ウエールズ、ジョーンフォンテイン主演。孤児院を出たジェーン・エアはある屋敷の家庭教師となるが次第にその主エドワードに心ひかれていく、、、波乱に満ちた女性の半生。
11/15	13時半	自由を我等に (83分・字幕)	ルネ・クレール監督。刑務所脱獄を図った囚人二人。一人は逃げ切り大富豪に、片割れが出所すると、、、工業化社会の風刺と友情を描いた傑作。
11/22	13時半	アンナ・カレニナ (110分・字幕)	トルストイ原作。旅の途中で知り合った若い伯爵との逢瀬を重ねるアンナ。家族と名誉を捨てて伯爵の下に走るが、、、愛に翻弄された美しき女の恋の結末。

秋雨前線がようやく消えて、爽やかな秋晴れの季節になってきました。今年は梅雨らしい梅雨が無く、いきなり6月から真夏となりましたが、帳尻を合わせるかのようには9月は毎日雨が降っている印象でした。私の不正確な日記の記載と、気象庁の塩谷での観測記録を照らし合わせると、9月にコリーナで全く雨が降らなかった日は9月の30日間中10日間だけだったようで、3分の2は何らかの雨が降っていたこととなります。

ところで「秋雨」という言い方を江戸時代の人々は好まなかったようです。「あきさめ」が「飽きる冷める」に通じるからか、春雨と違った情緒を大切にできなかったのかと注1ある詩人は書いています。春雨は冬が終わって春の暖かさを連れてくる雨。自然に緑といのちを与える暖かい雨です。秋雨は冬の寒さを連れてくる雨。自然から色彩といのちを徐々に奪っていく冷たい雨です。春と秋は異なった情緒を日本人にもたらしてきたようですが、どちらの雨も季節の移り変わりを象徴する雨には変わりがないようです。

「季節の移りかわり」というと私達はそこに「無常」という言葉を重ね合わせてしまいます。特に夏から秋そして冬への季節は、あらゆる自然のいのちが死に向かって移ろう季節です。それが再生の準備であろうとも、人はそこに自分のいのちを重ね合わせ、人間の命のはかなさや世の頼りなさを感じずにはいられませんでした。「無常」は「常でない」ことです。簡単に言えば「変化」と言うことなのでしょう。仏教的に解釈すると、この世の中の一切のものは常に生滅流転して、永遠不変のものはないということです。

「無常」は仏教用語でしたが、日本に輸入されて日本の自然と日本人の感性と結びついたとき「無常感」として、人生のはかないことやそのさまを表す言葉になっていきました。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」鴨長明の方丈記の冒頭です。世の中の生滅流転を川の流れと水の泡にたとえて「無常感」を表現しています。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし」これは平家物語の冒頭です。「祇園精舎」はお釈迦様の僧房の名前。「諸行無常」は仏教の三つの根本教理（三法印注2）の一つで、世の中の一切のものは無常であるということ。そして「沙羅双樹」の下でお釈迦様は涅槃に入られました。平家物語は冒頭から仏教用語が立て続けに現れる、日本的な「無常感」の物語です。

全てを「無常」と認識する「無常観」と、「無常」を感情として受け入れる「無常感」は似て非なる言葉です。世の中の一切のものを全て常がないものであると観ること、つまりはありのままに観ることが「無常観」です。その無常の世は「苦」そのものであり、そこから脱却し安らぎのところ（涅槃）にたどり着くことが仏教の目的です。「無常感」は常がない世間や人間の儚さを情緒的に感じ受け入れること。方丈記や平家物語に代表される「無常感」です。芸術や隠遁生活を支える日本人の情緒的美意識です。

どうやら仏教としての「無常観」は日本人に受け入れられる過程で「無常感」に変わっていったように見受けられます。本来「無常観」は全てを「無常」と観てそこから脱却するための智慧の働きです。どこまでも世の中をありのままに観ようとする、平等かつ慈悲に溢れた仏さまの智慧が要求されるのです。ところが日本人は「無常」の中に生きることを高踏生活と見いだしたか、その中で生き続けるしかないときあらめたか、いずれにしても、そこに安住することを選択したのです。それは現実逃避とも言える態度かもしれません。現実世界から、詩歌・小説・物語・歌舞・音楽などの狂言綺語の世界に逃避できる日本人はごく一部の貴族だけでした。ほとんどの大衆は現実逃避したくてもする場所もないのが現実です。ですから、唯ひたすら題目や念仏を唱えることで後生・来世の安楽を願いながらも、現世安穩のためにむしろ旗を掲げて現実世界で戦い続けなければ生きて行くことが出来なかったのです。

「無常観」はありのままの「事実」です。「無常感」は事実に対する私達の「思い」です。「事実」と「思い」の間を埋めてくれるものが本来の宗教の役割ではないでしょうか。「事実」と「思い」の乖離が大きければ大きいほど、その食い違いに苦しみ、その世界は住みやすい世界ではなくなるのです。その時人は、逃げるかその世界にとどまるために戦うしかないでしょう。日本の仏教は平安末期以降、現実逃避している貴族たちの国家鎮護・為政者の宗教から、逃げ場が無く戦う選択肢しかなかった大衆のための国民宗教となりました。法然・親鸞・道元・日蓮などの祖師の開いた、今に連綿と続く私達のための仏教です。それは「無常観」と「無常感」が一体化した安らぎのところを求めるものだったのです。さて、今私達の周りには宗教は「事実」と「思い」との間を埋めてくれるものとなっているのでしょうか。

秋晴れの天気が安定するかと思えば、このところ台風が頻繁に近くを通過していきます。「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。」注3台風の翌日はしみじみとした趣があり面白い、とはとても言えないような災害が今年は非常に多くありました。「事実」と「思い」の 琉游舎：戸井 出琉・恭子 間で行ったり来たりの私の日常に、自然はいつも「事実」 お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 の冷徹と「思い」の儚さを突きつけてくるようです。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

それではまた次号でお会いしましょう。（出琉）

注1：「雨の名前」高橋順子 小学館

注2：「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」 注3「枕草子」